

近代デザイン史で、ウィリアム・モリスは避けては通れない重要人物とされている。そのため私の手元にはモリスに関する本が大きな図版集も含めて何冊もある。しかしながら私にとってモリスは、読むほどに遠ざかっていく不思議な存在である。中世懐古志向と社会主義的ユートピア思想がよくわからないし、美術批評家のラスキンやラファエル前派の画家たちとの交流がモリス理解をさらにややこしくしている。それでも作品が好きであればアバタもエクボになりうるところ、作品がどうにも受け付けられないので困ったものだ。ここで述べることは好き嫌いとか生理的な相性とかの低次元の話なので、どうか気になさらぬようお願いしたい。

19世紀、パリでは初期の印象派の画家たちが登場するのだが、同じ時期にロンドンでラファエル前派といわれる画家グループが活動していた。彼らのいうところは、「絵画はラファエル以後は自然を理想化するようになってしまった。ここで以前の神の誠実な職人であった時代に戻って、自然を忠実に再現にすべきだ」ということであった。ミレイ、ロセッティらが素晴らしい作品を残しているが、美術史家のゴンブリッジは「ミレーやクールベと出発点を同じくしながら、彼らの生一本な熱情は袋小路に乗り入れてしまったのだと思う。(中略)彼らに比べた時、伝統のしきたりにとらわれぬ自然探究をしたフランスの画家たちの活動は、より豊かな結実をもたらしている」と、あっさり総括している。つまり、フランスのミレーやクールベがマネやモネを触発し、それがルノワールやセザンヌその他に面的に拡張していったのに対して、ミレイやロセッティは一時代のローカル活動の域を出ることはなかったということであろう。

このラファエル前派の画家たちと親密に活動していたウィリアム・モリスは、自身は画家の道は進まずデザイナーそしてビジネスの道を選択した。そしてその活動は、アーツ・アンド・クラフツ運動と名付けられることになったが、まずは具体的に一点取り上げたい。図1はモリスがデザインした壁紙の原画である。私はモリスの一連のデザインをみて、かねがね不思議に思っていたところがある。それは図-1のように、葉がみな正面を向いていることだ。そして背景の抜けが悪い。この不自然さからくる鬱陶しさが、私がモリスを受け付けられない一番の理由で、ほぼ生理的なものといつてよい。そしてモリスが親しくしていたロセッティの絵画にも、同じ傾向が見出せる。図2の植物を拡大すると、やはり葉が都合よく正面を向いている。自然を忠実に再現するつもりが、無意識のうちにラファエルのように理想化しているのである。ちなみにこの絵に描かれた女性はモリスと結婚したジェイン・バーデンである。

モリスを語ると話があちこちに飛んで、手短かに上手にまとめることができない。続きは次に。



図1. モリスの壁紙「ブドウ」の原画



図2. ロセッティ「デイ・ドリーム」より

ウィリアム・モリスを語る難しさは、『ウィリアム・モリス』リンダ・パリー／河出書房新社を開くとわかる。項目別に専門家 16 名が記述するほどなのだ。モリスはオックスフォード大学卒業後に起業したが、手掛けた製品を列挙すると、教会のステンドグラス及び内装、家具、タイルと食器、壁紙、テキスタイル（カーテン、タペストリー、カーペット）、書体設計、書籍デザイン、書籍出版に及び、どれもが精魂込められた作品ばかりである。この他に、モリス自身による詩や文学の執筆があり。さらに社会主義活動家としての業績も併せ持っているので、何かひとつに代表させてモリスを語ることなど不可能だ。

モリスは起業にあたり資金に苦勞することはなかった。父がシティにある有名な証券会社の株式取引人で、鉱山開発事業投資で成功した遺産を受け継いだのである。そのためモリス商会の製品は売れ行きを気にすることはなく、実際にほとんど儲けが出ていなかったらしい。そのためモリス没後に商会も閉じた。

モリスよりも一世代前に生まれたジョサイア・ウェッジウッドやミハエル・トーネットが、それぞれ陶器メーカーや家具メーカーとして引き継がれ、現在なお世界中の人々に使用されているのに比べて、モリス商会が残れなかったのは何故だろう。言葉は悪いが、資産家の道楽であり上流階級の仲間内での需要しかなかったので、市場に受け入れられる視点を欠いていたのではなかろうか。もつという、ウェッジウッドやトーネットのような普遍性の高いデザイン力を、モリス商会の製品は持っていなかったのではないだろうか。デザイン史では、モリスは後のデザインに大きな影響を及ぼしたことになっているが、モリス風デザインが継承されている事例を私は知らない。

さてまたモリスの壁紙デザインを図 1 に載せる。ラファエル前派と同じく自然を忠実に再現した結果が、このような不自然で異様なデザインとなる。モリスより 400 年も前に図案されたオリエントの植物模様（アラベスク）の図 2 と比べると洗練の度合いがあきらかに低い。モリスは当然アラベスクもや当時大流行していたカシミア由来のペーズリー柄も知っていたに違いなく、それらに反発する気持ちは理解できるものの、それが図 1 になると少し苦しい。

モリスは権威となってしまったので、多くの人は素直に観賞してグッズも抵抗感なくお買い上げされているが、なかには私と似たような疑念を感じている人が 1 パーセントぐらいいるかもしれない。

話は変わってウェッジウッドと同時期に開業した陶器メーカーにミントンがある。その長い歴史のなかで最大のヒットとなったのはハドンホール・シリーズあり、イギリスのハドンホール城のタペストリーが図案の由来とされている。そのタペストリーはフランスのヘンリー 8 世からの贈り物であるが、画像をみる限り直接的なヒントは見出せない。しかし製品の図柄をみるとオスマン風アラベスクを思わせる。メーカーとしてはオリエント色をあからさまにしたいくない事情があるのかもしれないが、私はそのシリーズのカップを愛用している。



図 1. モリスの壁紙「アカンサス」



図 2. リュステム・パシャ・モスクのタイル装飾  
(イスタンブール 1561 年頃、オスマン朝)  
※『すぐわかるイスラーム美術』東京美術より



図 3. ミントン、ハドンホール・シリーズの図柄